

時代小説
自選集
第十二卷

炎の柱
織田信長

大佛次郎

大佛次郎時代小説自選集

第十二卷

炎の柱―織田信長―

昭和四十五年八月十日 第一刷

定価 八〇〇円

著者 大佛次郎

発行者 二宮信親

発行所 読売新聞社

郵便番号一〇四 東京都中央区銀座三の二の一

五三〇 大阪市北区野崎町七七

八〇二 北九州市小倉区明和町一の二

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

炎

の

柱

— 織
田
信
長 —

装丁・題簽
見返し繪
佐中
多村
芳岳
郎陵

使者

天正七年の六月なれば、三河の徳川家康が安土に在る織田信長に駿馬を贈ろうとして、老臣の酒井忠次を使者に立てた。徳川家の筆頭第一人の忠次は自分からも奥平信昌と馬を奉ることにして、家来に牽かせて近江路に入った。梅雨も終つて拭つたように晴れ上つた夏空が琵琶湖の空にひろがつた季節である。

雨後の水かさを増していた湖も鮮かな色を見せて、明る過ぎるせいで沖の鳥影は光の中に溶けて消えて了つてゐる。若葉の芦の洲の間に舟の通路となつてゐる水がまた青いのである。

四年前から建築を始めた安土の城が、湖水をめぐらした松山の上に巨大な姿を見せて、忠次主従の目を驚かしめた。平地にあるかなり高い丘の背に七重の壮大な天守閣が建てられ、それを囲んで石崖を組み、四方の樓、部下の大將たちの屋敷で囲んでゐるので、山の上に大きな石の蓮華の花を盛り上げて見せたやうで、誰でも最初からびっくりして、歩いてゐる足も停めて了うのである。

「あれだ」

と、忠次も思わず手を上げて指さして、知らせた。

「めつそうもない大掛りのものだ」

自分が先に感動して了うのであつた。

「とんと、山のように。人間の手の力で、あれだけのものを築き上げた。都に近い場所で、威勢を天下に見せようとしたものだろうが、こう言う大きなものを作ろうと、最初、思いついたことが不思議じゃ。やつて見てから、出来るとわかつたことでの。見ぬ先には、考えられぬものではないか」

積上げた石崖の高さが十二間、天守閣はそれを二重に組んだ中に、南北二十間、東西十七間、高さが十六間ある。松山の上から街道をにらみおろして、見上げるばかりの石の山なのである。これまでの諸大名の城が、空壕を掘り土塁を築いて固める程度のもので、建物も柱は太いが、屋根の重苦るしく厚い田舎屋敷を大きくしたばかりのもの。忠次が累代仕えてゐる徳川氏でも、三河一國の領主となつてゐるが、生活は二十年三十年昔のものど、別に変化したように見えず、重く空気は沈滞して、ここに吹いてゐるやうな爽やかで新しい風は吹き込んでない。忠次から見れば、負惜しみではないが、その古風な堅実さがお家のよいところなのだ。なん時、起るかも知れぬ戦に備えて、台所が手一杯なのだ。新奇なことは出来ないのである。その上に、主人徳川家康の気性も性格も、この安土の城の主人のやうに急ではない。

歩いて近くに行くほど、城は高く大きく見えた。屋根瓦は、わざわざ唐人の瓦焼きを呼んで焼かせたもの、うわ葉を使つて黄色く光つてゐるので、日を受けて金色に輝くのである。

忠次の主従が入つた城下も、城が出来てから急速に町が発達し

たもので、建物が新らしく、きれいな上に活気がみなぎっていた。

「どこかまだ知らぬが、南蛮人の寺が出来ているそう。海を渡って来た切支丹の宗門の寺で、若い者を集めて教える学堂まであると言ふ」

信長公が何事でもあれ、新らしいことが好きなのだ。忠次は、年寄臭く、眉をひそめて見せて、こう言った。軽々しく新らしいものを追うのは、あまり堅実と言えぬ行き方だ。

しかし、この城下町の活気、諸国から商人が入って競って店をひらき、置かぬ物がないくらいに品物が揃っている様子は、樂座と言つて、寺や貴族が古くから持っていた營業權独占の風習を破つて、自由に誰にでも商品を扱わせた上に、足利將軍の下で濫用された徳政、借金を法令で棒びきにする悪習をこの安土の城下ではないことに決めたので、商人が悦んで集って来たのであった。どの店にも品物が溢れるくらいに豊富に見えた。見るからに珍らしい舶来の品物を並べて商う店があるのは、貿易港の堺につながるものだろう。都が戦乱続きで荒れていただけに、この新開都市が示している活気は、ものすごく思われる。城の普請がまだ続いているので、職人も多勢集っている。町を歩いていると、女子供が多いのが目につく。海道筋の城下町では見ないことだ。同じ商売の店が数多く別に不都合なく軒を列ねているだけでも、驚いてよい。

忠次たちは、曳いて来た大切な馬を、城のその筋の者に預け

て、献上の手続きをして、安心して宿舎に向うことになった。

「これであとは御沙汰を待つて、城に上つてお目通りして馬を御覧に入れ、我が君のお言葉をお取次ぎする」

手順を考えて見たのも、小心なほど律義だからである。宿に行く途中に大きな道路が、郊外に向つて開かれているのを見た。これは都と安土とを連絡する新らしい道路であった。三間幅の広いもので、両側に整然と松の並木を植え、これが夏の午後の炎天の下に、目のとどく限り青々とした蔭を列ね、蟬の音が滲むように湧き出ている。

「この道路も前にはなかったものだ」

と、忠次は感に堪えてつぶやいた。

一日おいて連絡があつて、忠次と副使の大久保忠世が登城すると、信長に会う前に天守閣の中を案内して見せてくれて、その時も天守の窓の高いところから、青い野を貫くこの新らしい道路を眺めおろした。地平の山の蔭に入るまで、遠く続く。

「途中の川には堅固な舟橋をかけて御座る故、火急の折、都にまいるのに馬で一日を要さぬ都合。隣町にあるのと同じで」

と、案内してくれた信長の近習は誇らかに説明した。

涼しい風が入った。城は三方を湖の水で囲み、岬のように突き出している。何隻かの大船が近くに沖がかりしている。海のように広い水なのである。今日は、沖がすこし曇っていたので、竹生島の影が、濃い紫色に見えている。

城内の結構は、見て廻つて、昔氣質の三河の国者をいよいよ驚

かせるばかりであつた。柱の数が二百四本立だと教えられたが、主要な柱の長さは八間、ふときは一尺五六寸、それも室内にある分は布をきせ、黒漆をかけ、襖は金で狩野永徳が絵を描いている。花鳥や賢人、西王母、駒を放ち飼してある牧場の画など、座敷に依つて画材と趣向を分けてある。これが七階まで順に昇つて見て歩くので、一番上層で三間四方、座敷の内外に金を貼りつめてある。柱には上り竜下り竜の彫刻、天井には天人の像。室内の襖も全部、画で埋まっている。人工の限りを尽したものだ。案内してくれた信長の近習の武士が、我がごとのように得意で一々について説明するのはもつとものことだが、忠次のような昔者は見て廻るだけで消化できず煩わしいようであつた。

「いや、大したことだ。まことに、こうして拝見致さぬ限りは、とうてい外では考えも及びませぬ」

茶道の者が来て、信長が会う用意が出来たと知らせたらしく、ようやく見物を打切つて七重の階段を降りることに成つた。

別の棟の建物の、北側にある小座敷に案内された。茶の湯に用いる部屋らしく、山に寄せ、石を置いた小さい庭に向つていた。ここは武家の居間らしく、光が暗く、装飾もない。

二人が控えていると、足音が聞こえ、襖があいた。無造作に、信長が入つて来た。平伏して迎えた二人を、じろりと見おろして上座に着くと、簡単に挨拶した。

「馬を貰うた」

特に有難いとも言わない。信長は四十五六歳だったが、色が白

く端正な顔立で、年齢よりも若く、秀でた容貌を、暗い色の壁の前に浮き上らせていた。静かだが、人を見る時の目が刺すような冷たい光り方をするのが昔からである。

信長は他人の話を聞いていて耳に入れず、自分だけ話す場合が多かつた。

この場合も、丁寧で永々しい酒井忠次の挨拶を不意に途中でさえぎつた。

「近頃、三郎はどうしておる？」

と、言いながら、手紙らしいものを手に持つて出て来たのを、自分の膝の前に置いた。

「大分、粗暴な行儀があるように聞くが、どうだ？」

岡崎三郎信康は家康の嫡男で、信長の娘徳姫が嫁いでいた。信長には婿である。鷹のように俊敏な若者だが、この忠次とは何かと拙くて、衝突しがちであつた。その意味で、これは、忠次には好話題であつた。

「さればで御座ります」

と、忠次は信康の所業をそれとなく、あてこすつて信長に告げようとする態度を採つて、どう話すかを思索した。

忠次は戦場で再三、作戦上の意見で若い主人にやり込められていた。その上に、合戦のない時の田舎の城の生活で、古い武士たちの仕事は、女色男色で、初老でもその道の猛者だった忠次は信康が召使つている腰元に目をつけて連れ出して側室にしたので、信康が一徹の気性から立腹して、罵つたことがあつた。そんなこ

とで、日頃から若い主人をよく思っていない。自然と、それが顔色に出て、何か言い出そうとしたのである。

忠次が話出そうとする前に、信長は短氣らしく、膝の前の書状をひらいて、

「信康の行状について、簡条を挙げて、こう告げて来た」

突きつけるようにして忠次に見せた。

「読んで見よ」

忠次は、信長が指で示した部分を読んだ。簡条になって一々、列挙してあった。二三カ条読む内に、忠次は自分がそれまで信康に不利な話をしようとしていたのも忘れ去って、不意に心臓をつかまれたような衝撃を受けた。

書き出していることが一々事実なので、狼狽した。信長は、それ以上は、口をきかず、するどく、その顔色を見詰めていたのだ。

信康が夫人徳姫の面前で、女房の小侍従を殺したことも事実である。狩に出て、道で法師を見て、今日の獲物のすくないのはこの坊主のせいだと、首に縄をつけて、馬にひかせて走らせて殺したこと、盆踊の踊子の罪のないのを手に掛けたこと、それは信康個人の行状としても、信康の母、すなわち家康の正妻の築山殿が甲州の武田勝頼に密書を交換して信長に背こうと計っている事実までが、はっきりと書き出してある。

酒井忠次は家康の重臣で、主家の大黒柱の重きをなしていても、外に出て機転の利く人物でない。田舎に土着の人間の狡さはあるが、大根は実直で、話を言いまぎらしたり、嘘などつけない性質である。自分が信長に顔を見詰められているのを、彼は何よりも強く感じていた。この書状に記してあることは、確かに在ったことと、正しく在りそうだと自分も見えていたことなので、精神が混乱し、返答に窮して来た。

岡崎三郎信康を生んだ築山殿は、信長が亡ぼした今川義元の手もとに育って、義元の妻の姪で、今川氏が政略結婚で家康に結びつけたひと、今川氏の出を誇りとして、幼い時家康が駿河に人質に来ていたのも知っていたし、夫人と成ってから権高く夫婦の間が不和となつて別居していた。今川義元を殺した信長には恨みを抱いているし、信長の娘の徳姫が自分の息子の信康の嫁に來たのを決して快よく思わない。二人の夫婦仲を裂こうと、自分から若い美しい女を選んで信康に与えている。徳姫が女の子ばかり生むので、男の子がなくてはならぬ大名の家の後取りに当然のことだと、徳姫に向つて公然と言つて聞かせるのである。

築山殿は夫婦不和となつた夫の家康を元來下様に見たし、憎しみをこめて呪つていた。我が子、信康だけが大切なので、將來の希望を信康の一身に賭け、やがては家康よりも信長よりも上に立つ人間に仕立てたいと、手段を尽して画策した。築山殿から見れば、信康だけが高貴な今川氏の血をつないでいる。成り上り者の織田信長の下に付く生れではなかつた筈だ。捨てられた女とし

て、信康をそこまで出世させるのが、意地だし、夫の家康にもまた義元を亡ぼした信長にも復讐を遂げることだと信じているのである。

築山殿は岡崎のお花御殿と言うのに住んでいた。夫の家康が浜松から岡崎の城に来て自分から挨拶に出て行くことをしない。まったく自分だけ一城を構えた態度である。まだ女ばかりで、権高いが美人であった。近年、唐人の医者で滅敬と言う男が築山殿の身辺に付添っていて、ただの関係でない、どこからとなく噂された。家康がそれを知っていて構おうとしない。築山殿がまた夫を眼中に置いてない行状である。その滅敬が甲州から流れて来た人間で、武田方に通じているから油断ならぬと言う話さえ家中に流れていた。

今、信長の前で酒井忠次が見ている書状には、その滅敬の名も明かに出ていた。築山殿母子がこの医師を使って甲州の武田勝頼に通じ、将来信康を引立ててくれる条件で、戦争になった場合は武田方に内応すると密約を交したとまで書いてある。ないとは忠次も言い得ないことだ。読んでいる間に五体に汗が湧き出た。

信長が忠次に返事を求めた。短気の性質で、待っていない。

「どうだ？」

と、声をかけた。

「在ることか、ないことか？」

忠次は動揺した。

「さればに御座ります」

「在ったことかと尋いておる」

「おそれながら」

汗が、たらたらと鼻の脇を流れた。

「これに似たことは御座りました。したが……これは？」

と、筆者に依って打消すことも出来ようと、必死の思いで書面をにらみながら言った。

「おんな書きのように見えますが、何者から簡様な儀を……」

「書状の主か」

忠次の顔に向けた信長の目が、つめたい光を放った。

「娘だ」

と、彼は言った。

「徳姫が自分から書いて知らせて来たのだ」

あつと忠次は、あいた口がふさがらなかった。信長は我が子からの噂なので、重大と見たのである。忠次にも、これは打消しようもない相手であった。三郎信康の妻が、築山殿ばかりでなく自分の良人の罪状まで訴えて来たものである。

忠次は、まだ、その訴状の最後の部分までを読んでなかった。

信長が、それに手をかけて、急がしく巻き返した。

今一応の拝見を、と申出て、弁疏の方法を思案する余裕も与えず、信長は持前の大きな声で狭い部屋も割れるほどの勢で言った。

「家のおとなが、ことごとく存じ申すことなら、もう疑いはない。この分では、とても物になるまい。信康に腹を切らせるよ

う、帰って主人に申せ」

信長は立上った。

忠次の頭上から、また、大声で言った。

「わかったか？」

忠次は、一言もなく、

「はあ」

と答えて手を突いた。信長の袴の裾がひるがえるのが見えた。

さっと襖をあげて出て行って、後手に音高く襖を閉めた。忠次は、ぼうぜんとして、起ったことの内容の重大さをまだよく理解していない。

付いていた大久保忠世が、これは容易ならぬことと色めいていた。

正使の酒井忠次は、徳川家の出頭第一人の者だし、家康の叔母を夫人として、ただの家来ではない。家中でその重き地位に在る人物が、信康にかけられた疑いを解こうとしなかったのは、理由は知らず、取返しのかねことであつた。

宿舎まで戻つたが、忠次は言葉がない。主人家康の嫡男で、家の後取りを切腹させよと言う厳しい命令には打ちひしがれた。留守に残つた供の者が玄閼に出迎えたが、忠次の顔色を見ただけでは、それだけの大事になつたとは想像もつかなかった。

「昨夜、お話の堺の商人が、異国の段通を持参な致して、あれに

お待ち申しております」

奥に入る廊下の脇の部屋に、その商人が手代を連れて控えていたのが、一礼して、商人らしい機敏な様子で手代に合図すると、太く巻いて置いてあつた厚い大きな布を座敷一杯に転がしてひらいて行つた。忠次は段通だと見て、国の土産に買入れようと声をかけさせてあつたのだが、これはヨーロッパのフランスかスペインで作るつづれ織の窓掛けの布で、王族か貴族が犬を連れて狩猟をしている図面が淡い黄や緑や紅の色糸を使って美しく織り出しているものだった。猟犬もいるし、足もとの草野には、さまざまの草花が咲くのを、こまかく織り出してある。狩をする貴族か国王は、羽毛をつけた帽子をかぶり、従者が馬のくつわを取つて供し、裾のひろがつた服を着た女中たちも優雅な一団となつて後に立っていた。遠い林の前には、犬に追われて鹿が走っているのがある。

忠次は目をくれただけで、不興げに立去つた。それどころではないのである。

大久保忠世が、氣がついて留守の者に言った。

「またの時に来させよ」

彼も忠次を追つて奥に入つた。忠次は、坐ることも忘れたように座敷の真中に突立っていた。

忠世は膝をおろしながら、忠次の注意を促がした。

「も一度、お目どおりを願ひ出て、お話にならずばなりますまい」

「うむ、そうだ」

と一度は強く言っておいて、忠次はにわかに老人くさい弱々しい顔付に変わって、言い出した。

「信長公の御気性、ここでまた、くどく申したら……反^あつて立腹されて悪かるう。さて、何としたものであらう。こんな目に遭^あうとは思わなんだぞ」

「しかし、また」

思わず忠世も顔色を烈しくした。

「このまま、戻られては、最早、取返しつかぬことに相成りますぞ。あの場で一々、一切、なきことと、聞かぬことと、一徹に仰せ通さるべきで」

忠次は苦しげに顔を曲げて、どっかと坐り込んだ。

「それが、他の方の訴状でない。徳姫さまから出た。何として、嘘偽りだと申立てられよう。一つや二つならよい。……ああ箇条毎に……」

忠次は、逃げ腰であった。最早、自分の才覚で切り抜けられるところでない。最初から、こう諦めたようである。事件の源が徳姫から出ているかぎり、打消してかかって、取上げられるものでなかった。

老人は、だらしなく意氣沮喪した。

「戻って大殿に御相談申上げ、信長公の方には徳姫さまから前の書状にあやまりもあつたように取りなして頂くことだ」

近頃、公衆の前で旗下の武士たちの馬揃いをさかんに行つて、

自分から出馬して得意でいる信長に、すぐれた馬を献上に出る晴れの使者、悦ばれると決つたことだし、徳川の重臣としても身の栄えと思ひ込んで出て来たのが、足もとの地面が急に落ち込んだような仕合せである。良い馬も問題にならず、若い主人を切腹させると命令を受けた。

早速に帰路に就いた。国侍として狭い世界の生活で養つた打算の働きが、次第に忠次を支えることになった。

自分が帰るよりも先に手紙をどけて、家康に事件を知らせた。徳姫さまから話が出たのでは何とも手の尽しようがない。これが忠次の救いであつた。徳姫は余人でなく信長の娘である。我が子から伝えて来たことだから、他人の言葉に耳を傾けるわけがない。お話してもお聞きにならぬのである。

これだけ手紙で予告して置いて、数日後に彼は家康の前に出る。徳姫を動かして局面を変えるよりほかに道はない。そう主張するのである。

老人は氣力を回復して来た。付添う者から見ると、これは理解出来ない。やはりお家重代の老臣で、これだけの大事に当面して、肚^{はら}がすわつたところがあるのか、と思う。しかし、これも主従が三河にはいり夏雲が立つ炎天の野のはてに、やがて岡崎の城が見えて来るようになると、忠次も心平らかではなかつた。岡崎の城には当の三郎信康がいた。そのひとに切腹させるように命令を彼は受けて来たのである。同じ城内に築山殿も徳姫もいる。青い丘を列ね、水の美しい川をめぐるせたこの小さい城に手のつ

けようでは大爆発を生む怖ろしい力がねむっているのであった。

「御城下を通るのでは、信康さまに、御挨拶にまかり出ずばなるまい」

城が見えてから、忠次は、こう言い出した。重いひびきが声に伴なつた。それはさすがに心苦しく、耐え難かつた。

一行は城下を避け、水の浅い箇所を見て矢作川を渡つた。炎天の河原の砂に各自の影が黒く印された。小高い地勢を占めた城に物見に立っている者があつたら、城下を避けて通るこの一団の人影を見咎めたのに違いない。

死んだように風が落ちて暑い日であつた。郊外に出てから、やっと気を許るして街道に戻つた。一面の夏野である。埃の白い道が単調に起伏して続いている。

大久保忠世が急に手綱を抑えて、物音に耳を傾けた。狩をしているのではないかと、鷹を呼ぶ声がする。

松林が山の裾にひろがつていた。誰か人がいて、木の間から身を起こして、こちらの人数を見まもつた。その男は葉越しの日光を点々とからだに受けていたが、青い蔭のみにいて、形が見えにくかつたが、肌をぬいで、森の中の流れに身を屈めて、汗を落としていたものだった。

「誰だ？」

と、のぞいて見てから、

「酒井の爺ではないか？ いつ、見えた？」

忠次は、あつと思ひながら、馬から降りた。見事に厚い裸かの肩と胸板を見せて立っている若者は、彼が今、避けて通つて来た岡崎城の主、三郎信康である。二十一歳の若さが、顔付から五体を彩つて、炎天下に、見てまぶしいようである。

「暑い、暑い」

と笑つて、

「老体は、また、どこへ行く？」

「安土へまいつた戻りで御座る」

「それは留守にして気の毒した。城に寄つてくれたらう。よかつたら、これから一緒に戻れ」

信康は、そう決めたらしく、すぐに引返そうとして、草の上に脱いであつた衣類をつかみ取つた。馬をつないで休ませてあつた。

「急ぎまする故、……今日は、このまま、御免蒙りまする」

「なんだ、折角、来たのによいではないか？ 吉田までなら、夜道を行けば涼しい」

無理に別れて出かけることにした。

信康は、老人のせせこましい気性をあわれむだけで、無理に制めようとはしない。鷹狩りの供の家来たちが自分をさがして森から出て来るのを見返りながら、忠次たちに言った。

「ええ、帰れ、帰れ。話もないわ」

忠次たちがまだ離れない内に、信康が森の中の家来たちを呼び

寄せるのが聞こえた。

「ここに泉が湧いてゐる。早く来い」

上半身を裸かのままの信康は、木蔭のぶよの類が人の匂いに集つて来るので、手に持った衣類を宙に振りまわしながら、陽気に笑い声を上げた。

供の武士の中には忠次もよく知っている顔も見當つた。若くて、戦場の働きだけを得意にしている筋骨たくましい男たちばかりである。森の中の崖の裾に湧き出ている泉の在りかを教えられると、それを聞い、自分たちも競争で肌ぬぎになり、乱暴に両手で顔を洗ったり、腕の汗を拭いて、野太い声で笑い興じた。木の葉のそよぎ光る中に、明るい声音に充ちている。

信康もその騒々しい中にいる。主従と言うよりも仲間、数度の合戦に生死の危機を共にくぐつて来た者たちばかりである。信康は現在、二十一歳だった。初陣は十七歳の時である。大井川で武田勝頼の大軍を迎えて、味方が後方に退くより他はなかった時に、初陣の身で、

「残らせて貰いたい。稽古の爲です」

と申出て、氣丈に、しんがりのいくさをして、勝ち誇つた敵の進出を喰ひ止め、家康たちの本陣が安全な後方の城に落ちのびるようにした。

「あの時は、あたら若者を死なせたかと思つた」

と、その後、幾度か家康が話したのは、よほど印象が深刻で忘れられなかったせいらしい。信康はいざと成ると強烈な氣性を現

わした。親の家康が幼年の折から他家に人質に取られて育ち、苦勞を重ねて、三十なかばで老人のように背を屈めた姿勢が癖となり、植木の盆栽を見るように小さく硬くかたまっているのにくらべて、信康は伸び放題に伸びた若木を見るように、体格も大きく、力も強く、我儘なまでに自由闊達^{かくたつ}の精神に溢れていた。

若い家来たちから好かれた。親の家康には期待出来そうもない積極的な明日の希望を約束しているものである。若殿の代になつたらお家は必ずさかになる。今のように四方に氣兼ねして、保身に精一杯に、領地だけを放すまいとしているのとは様子が違つて来よう。人は、こう信じている。忠次のような譜代の重臣が、見ていて、はらはらすることが多いのだ。何事も余分に、なさり過ぎるのである。若さの、血が逸る嫌^{きら}いがあつた。

しかし、忠次は、信康を切腹させよと命令を受けて主人に取次ぐことに成つた。あの堂々として見事な若者に腹を切らせるのである。

壁

徳川家康は八月三日に浜松の城を出て岡崎に來た。

酒井忠次が安土から歸つて信長の意志を伝えてから、数日間、家康はどうしたら信康を助けられるかを、夜も寝ずに考え抜い

た。忠次はもとよりその他老臣たちも、信長の強い意向の前には無力で、氣やすめを言ったり何か方法がありそうに励ましてくれるが、親の立場では安心など思いも寄らなかつた。浜松には風のない蒸暑い夜が続いた。明け方まで、木の葉が仄えつけられたように動かずにいる暑い夜であつた。

信康は彼の最愛の子であつた。親の慾目だけでなく、器量すぐれて生れ、今日まで成長して来た。二十一歳の男ざかりと成り、これまでも幾度か、親の自分の力とも頼りとも成つて驚ろかれたし、段々将来を楽しみに感じて来ていたのである。ここで死なせて了うと言う途方もない考え方が、不意に入つて来て、抜き去れなくなつた。一度失くしたらこの家に二度と出ないくらい男が信康なのだと、にわかに明瞭と成つた。そのことは疑いない。

助けたい。親の自分が身代りに立つてでも死なせたくない。切ない思案の中で、家康の癖で、知らずにあせて爪を噛んだ。爪は、どの指からも噛む余地がなくなつた。朝になると血が滲んでどの指も痛んだ。

宿直の武士が次の間にいて聞くと知つていて家康は絶望の声を上げて、呻き苦しんだ。そうしてはいられぬことだ。死んだ魚のように軀を投げ出して動かず、目を夜の闇にあげ放つてゐる。何の工夫も泛んで来ないのだ。耐えがたいことで、夜具をつかんで、また呻いた。どんな抵抗も無駄のように見える。出口はない。動かない壁とたたかつてゐるのだった。唯一の方法として、家中を挙げて武力の抵抗も考えられた。我が子を守る為に、

討死を覚悟のいくさを起こすことである。信長の前から酒井忠次が黙つてひきさがつて来たふがいなさに、家康はしばらく恨みことも出なかつたくらいだった。帰つて家康の前に出ると、忠次はきおい立つて、にわかに、一戦を覚悟したいと主張し始めていた。老人は実に真剣で強硬なのである。

家康の背後には強力な甲州の武田勢が以前から隙さえあれば領内に攻め込んで来ようとしていた。家康がそれを支えて対抗出来たのは信長が味方してくれているからなのは無論である。その支援を裏切つて信長に向つてたたかひを挑もうとは、やけの仕事だし、絶好のこの機会を甲州勢が黙つて見送るわけはなく、たちまちに攻め込んで来て、両面に敵を受け、はさみ撃ちとなることなのだ。家中が枕を並べて討死すればよい。そう言うものではないのであつた。

結局、信長から話があつた時に酒井左衛門尉忠次が、ただおそれ入るばかりでなく、打消しにくかつたことも、絶対になかつたことだと主張して信長の確信を揺さぶつてくれればよかつたのである。礼儀も行儀もなく、無骨に、いっくく態度を曲げなかつたら、信長もこれまでに思切つた決定を下すのをためらつたことであらう。信康は、信長にも婿ではないか？

しかしまた、訴状が徳姫から出たのは、婿であることが、逆に不利となるものであつた。嫁にやつた娘につれなくした、その面前で侍女を殺して見せたと成ると、赤の他人ならば問題にならぬことも、捨て置かれぬと思うように仕向けたであらう。家康は信

康のより役に付けてあった平岩七之助親吉を浜松に呼び出した。信康と徳姫とが不和になった理由をただす為である。信長の件はまだ聞かせない。

「どんな工合なのだ？　よほど仲が悪いのか」

つつみ隠さず聞かせて欲しい。より役の貴さまが行きとどかなかつたとは更に思わぬ。ただ真実を知りたい。

お心持がもつれたことはあった。だが、信康さまはその場かぎりに感情を爆発させても、あとに根を持たぬ淡泊な御気性で、お方さまのことも夫人として今も大切に思っておいでだから、ひどく不仲とも思われぬ。親吉はこう答えた。家康は人の心の裏を見るのになれていた。親吉が浮かぬ顔色を見せたのは何か隠しているものである。

家康は、縁さきの日なたに降りて、一匹の蜻蛉とんぼがとまったのを見まもつて、しばらく無言でいた。その姿勢のまま話の方角を変えた。

「築山の**ばば**と、徳姫とは、どうだ？　**ばば**が信康を二なきものに大切にしているのはよいとして、ただでさえ世間には珍らしくない嫁しゅうとめの仲、それに気性もあること故、徳姫に面白くないことも多かろうと察しておる。出来れば、若いもの達と引きはなして置きたいと以前から心配しておったが、信康が器量者だから中に入って悪くはせんだろうと思ひ、捨て置いた」

そこまで言ってから、家康は一点に停止していた目を上げて親吉の顔を見た。

「信康に寵愛ちゆうあいの女が出来ている。それが築山の**ばば**が世話して、部屋も**ばば**のいる花園の屋敷の中にあると聞いたが、これはまことか？」

親吉は汗をかいだ。

「武家のおあととりには男の子さまがなくてはかなわぬ、と、築山の御前から度々、仰せ出されておりました由に御座りまするが」

家康は、更に事情をただした。

「徳姫に面と向つて、築山の**ばば**がそれを言い聞かせたことがあると？」

「左様な儀も確か……」

「言わでもよいことだ。若い女なら立腹するわ。嫁も織田どのの娘だ」

更に言いたいことを家康は控えた。それは築山殿が今日でも亡びた今川氏の一類なのを身の榮えとして、信長の娘など眼中に置かぬ烈しい気性で、息子の嫁に対している事実である。その性質は、家康が良人おつととして重々迷惑して、遂に今日のように絶縁に近い状態になり、夫婦でいて顔を合せることもないほどに成っている。今川氏を亡ぼしたのが、徳姫の父の信長なのだから、都合から嫁に貰うには貰ったが、自分のものと考えている信康を徳姫だけには取られたくないのである。

家康は、たんそくした。

「よけいなことをするものだ」

築山のばばも古い。亡びて了った今川の家の亡霊をひとりで背負い込んで、離れないものになっている。世の中は変わって、今は織田の天下に成りかけているのも承知でいながら、いよいよ頑くなに、憎いものはいつまでも憎く、初一念を変えない。自分で美しい若い女をさがして信康の心を自分の方にひき付けて置こうとしたのも、そのせいであろう。徳姫が立腹するのは当然なのだ。だが、それにしても、良人の信康をさとの親に讒訴するまでに我慢がなくなったのは、どうしたことであろう。

家康が重ねて尋ねたのに答えて、親吉はおそれ入りながら話した。

徳姫の見ている前で信康が斬ったのは小侍従と言う侍女であった。信康は、小侍従が自分のことを蔭口して、徳姫の機嫌を悪くさせたのだと信じ、いさかいの間に、かっとなって立ち上ると、小侍従を斬った。それだけでは怒りが鎮まらなかった信康は、女の口に両手をかけて引き裂いた。その口から徳姫の耳に毒をそそいだのを無念としたのである。

「御台が見ている前ですか」

と、家康は沈鬱に言った。

「はい、さように承りました」

「その時、お方はどうしておった？ 気を失うこともなかったのか？」

「お顔の色が紙のように白く変れたと承りましたが、目をはなさず若殿のなさりようを御覧遊ばされて、ひとこともお言葉がな

かったので、さすがは信長公の御息女と申す者も御座りました」

「信康は……どうした？」

「もとより深く御後悔遊ばされました。前後を忘れて、よしなく、むごいことを致したと、我々も承ったことで」

戦国に生きて、武士たちは皆、人の命を我が命とともに物の数と見ない風習である。戦場を駆けまわって育った人間なのだ。人を手にかけて、その上に口をひき裂かねば我慢ならぬとは、その理由があっても家康には出来ないことで信康はそこまでやりとす性質である。中途に思案を入れたり、ためらわない。戦国に育った少年の勇邁の気、信長とてこれを咎める筈はない。ただ自分の面前で、そのむごたらしい処置を見ては、徳姫も前後を忘れて信長に訴えて出たのである。

それならば父が話して徳姫と和解させ、徳姫から信長に懇訴させる。

家康は、初めて明るい顔色を見せた。

「それは御台が怒るのがもつともで、信康から、あやまってやればよい」

封じ込まれた壁から外に、脱けて出られると思った。これも甘い考え方だったと後に気がついたが、その時は屈託がほぐれた。築山御前が信康を抱き込んで甲州に内通しているとの疑いなどは取るに足りぬ。良人から愛想づかしされて岡崎の城の一隅に小き